〈実践論文〉

地理教育における社会参加学習の課題

―学校周辺地域を対象とした授業実践を手掛かりに―

泉　　貴　久*

1．問題の所在と本研究の目的

地理教育が危機的状態にあるといわれて久しい。高等学校現場における履修者の減少に伴い，地理という科目そのものが各学校の教育課程や大学入試からの撤退を余儀なくされている。また，東京都や神奈川県における日本史必修化の施策は現行の世界史必修体制とも相まって生徒たちの地理を選択する機会が必然的に狭められる結果となっている。

このことに関連して，①国際人としての素養，②環境問題への的確な理解と行動，③自然災害対応能力，④空間的思考力，という観点から地理的素養を身につけることの重要性が指摘されている[1)]。このことは，地理の未履修による地理的素養の欠如が，異文化理解や環境保全，災害対策等にも支障をきたし，結果的にそれらに関連する現代的課題のより一層の深刻化を招くとともに，そのことがともすると，人類の生存をも脅かす事態にもなりかねないことを意味している。

地理教育が不振であることの理由の一つに，「単なる地名認知の手段とみなされ，社会との接点が見いだされていない」[2)] という地理教育に内在する問題点とともに，「認識的側面を重視し，市民的資質の育成が弱く」，「社会参加に関する資質の育成が十分に考慮されない」[3)] という科目上の性質も地理教育が不振であることの一因としてあげることができる。

地理教育は本来，社会科教育の一端を担っており，社会認識形成と市民的資質育成を目標に据えている。これに関連して，山口（2002）[4)] は，地理教育の役割について，「民主的・平和的な社会を担う市民の育成」と定義している。また，その内容について，「知的側面における地理学的基盤を十分ふまえ，態度・価値の育成という態度的側面との関連をはかっていく」ことを謳っている。すなわち，地理教育の内容構成にあたっては，地理学の成果に依拠しつつも，その成果が学習者の日常生活・社会生活上での営みや人格形成上においていかなる意味を持つのかを十分に考慮する必要があるといえる。山口の言説から，地理学と地理教育との密接な関係について理解を新たにするとともに，社会科教育の一端としての地理教育そのものの意義や価値について再認識させられる。

ところで，地理学は，地理教育の基礎的学問として位置づけられているが，その果たすべき役割について，「実在の地域における社会問題の解決」[5)] と「より良い地域のあり方を探るための政策提言」[6)] をあげることができる。さらには，近年，地理学研究と社会とを切り結ぶためのアプローチが複数の地理学者によってなされており[7)]，地理学の社会的貢献を考えるにあたって，何らかの示唆を与えてくれる。とりわけ，地理学者の一人である小野（2013）が貫いている地域社会に介在する「アクター（Actor）」[8)] としての姿勢は，まさに地理学者の社会参加を具現化したものであるといえる。ゆえに，地理教育もまた，地理学と同様，地域認識を基盤に問題解決・政策提言のプロセスを踏まえつつ，地域社会において主体的に参加・行動する市民の育成に貢献する必要があるだろう。

以上述べた点を踏まえ，本稿では，地理教育における社会参加学習の課題について明らかに

*専修大学松戸高等学校・筑波大学大学院人間総合科学研究科

するとともに，その望ましい方向性について提言を行うことを研究目的とする。その際，以下の３点を具体的な研究方法として設定する。

① 地理教育における社会参加[9]の概念について言及した上で，地理教育における社会参加学習の課題について，先行研究との関わりから論ずる。

② 社会参加を意識した地理授業について，筆者が高校地理Ｂで行った学校周辺地域を対象とした授業実践を手掛かりに検討する。

③ 実践から生じた成果と課題を踏まえ，地理教育における望ましい社会参加学習の方向性について提案を試みる。

２．地理教育における社会参加の概念

社会参加は，市民的資質の最終目標として位置づけられ，「地域（社会）のさまざまな活動や問題にその一員として関与すること」[10]と定義されるが，地域への関与そのものが直接的な行動を意味するのか，あるいは，意識や態度の変容を含めたより広い意味でとらえていくのか，判断しがたいところである。このことに関連して，永田（2013）[11]は，地理教育における社会参加を「学校での思考による参加を重視し，社会的論争問題について多面的・批判的に検討した上でその解決策を考え，地域をよりよくする改善案を社会に提案するところまでを射程に入れる」としており，参加の概念を直接的な活動のみに限定せず，より広い意味に解釈してとらえている。すなわち，授業で意思決定や政策提言などの探究活動を組み込むことで，学習者に問題への当事者意識を持たせることを第一義に考えており，そのことが結果的に，「学習者の行動の変革を促し，家庭でのライフスタイルの変換や身近な地域社会での活動へと結びついていく」という。よって，本稿においても社会参加の概念については，基本的に永田の見解を踏襲することとしたい。

社会参加については，従来の地理教育ではほとんど触れられてこなかった領域である。「公民教育は，地理教育と歴史教育の基礎の上で成り立ち，公民的資質の育成を深化・統合する場面を用意する」[12]という言説にあるように，中学校社会科カリキュラムがπ型構造となっている関係から，公民教育が社会参加能力育成を担うことが求められている。むろん，地理教育においても，高校教科書の内容構成から「現代的諸課題の追究・考察過程が重視され，生徒が社会問題を認識し，その解決策を考える形で授業が展開されるようになっている」[13]と判断できるものの，授業の成果が社会参加へ結びつくケースは稀であったといえる。

だが，地理教育が社会科教育の一端を担っている限り，社会参加能力の育成に積極的に関与するのは当然のことといえる。このことに関連して，泉（2012）は，「地域の実情に即した社会問題への解決・政策提言への試み」という観点から地理教育をとらえ，その最終的な学習目標を社会参加と位置づけた。そして，図１に示す６つの能力の育成を踏まえた学習プロセスを提案している[14]。この図から，地理教育のねらいを，①地域を構造的にとらえ，②そこに潜む問題を発見し，③その背景を追究することで，④望ましい解決策を考えるとともに，⑤市民として地域の将来像に対する積極的な提案を行い，⑥地域づくりに自ら参画していくための能力を発揮すること，ととらえることができよう。

３．地理教育における社会参加学習の課題

(1) 社会参加をテーマにした先行研究とその課題

市民性育成をテーマにした地理教育研究は[15]，地理教育国際憲章[16]や諸外国（イギリス，アメリカ，トルコ）のカリキュラムなどとの関係から地理教育の目標について論じた西脇（2003），学習内容，学習プロセス，学習方法の３つの側面から理論化を試み，それを踏まえた授業プランの提示を行った泉（2008，2009），ニュージーランドの地理教育の成果を踏まえて，わが国の地理教育のあるべき方向性について具体的な提案を試みた荒井（2011）など，一定の蓄積が見られるものの，社会参加に焦点を当てた研究は極めて少なく，管見の限り以下にあげる４名の研究者による成果があるのみである。

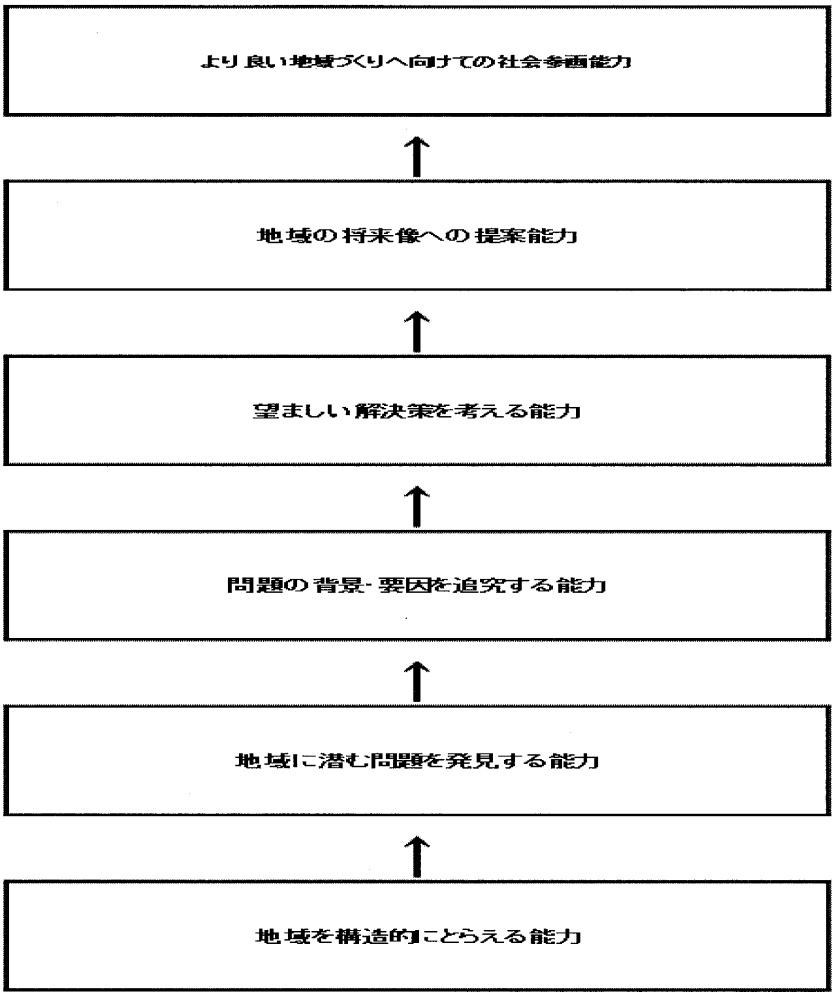

図１　地理教育における社会参加へ向けての必要とされる能力　泉（2012）より

井田（2006）は，「現代世界を理解するという枠組みから，変化しつつある社会で生きているという観点に学習内容を変革する」という立場から，①「課題の把握」→②「資料の収集」→③「資料の整理」→④「分析・解釈」→⑤「発表・表現」→⑥「価値判断・意思決定・参加（行動）」という６段階にわたる地理的スキルの提案を行っている。井田の提案は，社会参加へ向けた一連の学習プロセスを体系的に示したもので，現場教員にとって授業設計の際の指針となり得るものである[17]。

西脇（2008）は，開発教育や環境教育を視野に入れた地理学習の必要性を唱え，社会参加を軸とした小・中・高一貫カリキュラムの基本構想を提示している。具体的には，「分析・解釈」，「発表・表現」といった情報処理過程をもとに，「価値判断・意思決定」，「参加・提案」の過程を踏まえた学習プロセスの設定と，社会問題を核にした学習内容の編成を主張しており，それを踏まえ，同心円的拡大方式を念頭に置いた４つの発達段階に応じた学習内容の素案を提示している[18]。

竹内（2012）は，地理教育における社会参加学習の意義を自身の実践[19]を踏まえて明らかにした上で，身近な地域における直接体験を基盤とした４つの異なる空間規模（身近な地域，日本，国家間・国際，地球）における「重層的地域形成主体」の育成を目指したカリキュラムの視点を提起している。具体的には，地誌学習と系統地理学習の統合を視野に入れた社会問題をテーマにした主題学習に地域問題を組み込むとともに，異なる空間規模における社会問題との

往還的思考を繰り返すことを提案している[20]。

永田（2013）は，市民性を育成する地理教育について，「大小様々なスケールで表出し，その持続性が危ぶまれ，社会的論争問題となっている現代世界の諸課題について，それらの背景と解決策を探究することを通して，市民に求められる認識と資質を統一的に育成する教育」と定義し，ESD（持続発展教育）を構成する３領域「社会・文化」，「環境」，「経済」を意識して，①国際化による人間と人間との関わりから生じる「文化摩擦」，②産業化による人間と自然の関わりから生じる「環境破壊」，③現代化による人間と社会環境との関わりから生じる「社会格差」の３領域に区分し，小・中・高の発達段階を踏まえた学習内容の組織化と授業開発を試みている。永田によると，市民性については，前述のごとく「地理認識」と「社会参加に関する資質」の２つから構成され，前者を地理的見方・考え方の能力，後者を地理的問題解決能力の育成と関わっていることを示し，両者が統一的に育成されることを想定している[21]。

これら４つの研究はいずれも，市民性育成の視点が弱く，社会参加能力の育成が十分考慮されてこなかった従来の地理教育の改善を試みている所に共通点がある。だが，永田の研究を除いて，理念的なレベルにとどまっており，具体的な実践プランの提示までには至っていない。今後は，永田の取り組みに見られるように，実践者や学習者との連携の下での具体的な実践プランの作成とそれに基づく授業実践の実施，実践結果の検証とそれに基づく指導案の修正・再提示という一連のフィードバック機能をいかに構築していくのかが[22]課題である（図２）。

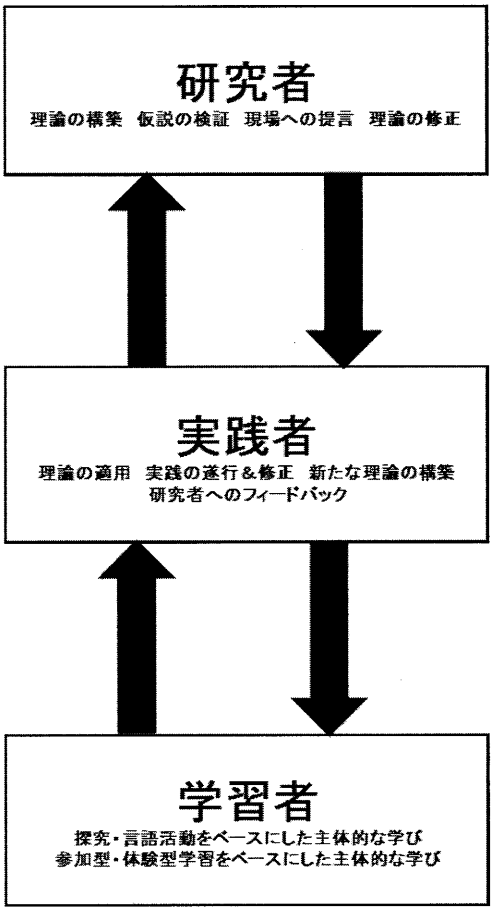

図２　研究者と実践者，学習者との望ましい関係　泉（2012）より
（注）研究者と学習者との関係については，実践者を介在することで成立する。

もっとも，永田も授業開発に際し，「地理認識の発達が高学年になるに従い，地域から国家，国家から世界へと同心円的に拡大していく」と論じているが，果たしてそのように結論づけてもよいものだろうか。なぜなら，交通・通信手段の発達によって，誰もが世界へとアクセスすることが可能になった今日，学習者の地理認識は，直接的にしろ，間接的にしろ，たとえ低学年段階であっても世界的スケールに拡大しているためである。グローバル化の進む今日，学習者の世界観をより豊かなものにしていくために，低学年段階においてもローカルを基軸にしつつ，グローバル志向のより広いスケールを意識した学習内容をさらに多く設定していくことも必要である。

また，そのことに加え，永田は，社会参加学習が成立しやすい探究型の主題的アプローチで構成された学習内容を研究対象にしているが[23]，中学・高校の現場においては，受験知による制約が強いゆえに，授業実践自体も学習内容を基礎から積み上げていく系統学習が主流にならざるを得ない。であるならば，系統地理的アプローチにおいても，あるいは，地誌的アプローチにおいても社会参加を意識した学習が組織されて然るべきである。

(2) 地理教育独自の社会参加学習

前述したように，社会参加は社会科教育において，大きな学習目標の一つになっている。唐木（2012）は，社会科教育の立場から社会参加学習に際し，①「地域・国際社会の諸課題に関する教材開発を進める」，②「児童生徒の話し合いを授業に取り入れる」，③「地域との連携を密にして授業を構想する」ことの必要性を強調している[24]。唐木の提案する社会参加学習の授業構想は，内容知・方法知の面において地理学習のそれにも当てはめることができるように思われる。事実，唐木は，中学校社会科地理的分野の学習内容「身近な地域の調査」を，「社会参加を社会科学習の方法として捉え，詳しく説明している箇所として注目に値する」[25]と評価している。また，「地域社会の課題解決を目指した社会的活動に子どもを積極的に関与させ，子どもの市民性を発達させることをねらいとした一つの教育方法」[26]であるサービス・ラーニングを通じて，地域との連携を意識した実践を構想していることから，地域を学習対象とする地理教育との共通点を見出すことができる。

しかしながら，唐木が学習対象としてとらえている地域は，学習者にとって，①「教室で学んだ新しい知識・技能を実際に活用」したり，②「課題を分析・解決する過程で様々な人々と交流」したりすることで，③「地域社会の一員としての自らの役割を自覚し，より積極的に政治参加するようになる」ための場としての位置づけであり[27]，必ずしも地域理解を深めるための場として位置づけている訳ではない。むろん，地理教育においても地域をこうした社会参加の場として位置づけていくことは当然のこととしても，その前提として，図1にも示したように，対象地域に対する構造的な理解が必要となる。

いうまでもなく，我々の生活舞台である地表面は，大小様々な空間的拡がりを持つ多数の地域によって成り立っている。そして，いずれの地域も自然的・社会的諸事象が相互に関わることで，それぞれ異なった空間的特性を持ち，他地域とは区別された「固有な場所的関係」[28]を有している。そして，前述したように，そのような地域認識を基盤に地域社会において主体的に参加・行動する市民の育成を目標とする地理教育においては，地域の実情を踏まえたより具体的な問題解決策と地域づくりのプランの策定が可能といえる。このことは，社会系教科諸科目の中での地理の優位性を示すものといえ，地理教育の独自性はここにあるといえる。

上述したことは地理教育独自の社会参加学習を構築していくに当たっての手がかりとなり，その実現へ向けて今後さらなる精緻化が必要となる。しかしながら，授業時間数の制約により，社会参加学習を地理教育の範疇だけで行うことは現実的には困難である。地理教育の成果が実社会において発揮されるためには，同じ社会系

教科を構成する公民教育や歴史教育はむろんのこと，他教科や総合的な学習，学校行事，ホームルーム・生徒会活動などとの連携が必要不可欠となる。あるいは，学校教育から一歩離れ，ボランティア活動やNPO活動との連携を視野に入れることも必要であろう。肝心なことは，社会参加能力育成にあたって，地理教育でできること，取り組まねばならないこととは何かを明確にしておくことである。

4．社会参加を意識した地理授業の事例

(1) 学校周辺地域を対象とした授業実践の概要

本稿で取り上げる授業は，筆者の勤務校に在籍する高校3年生の内部進学クラスの生徒38名（男子26名，女子12名）の地理Bにおいて2012年6月に実践したものである[29]。単元名「フィールドへのいざない」と題し，学校周辺地域でのフィールドワークと新旧地形図の読図作業を組み合わせた全10時間分の授業である[30]。地域認識の育成を主眼とした地理学習の典型ともいえる実践ではあるが，このような実践でも社会参加への手がかりが隠されているように思われる[31]。本単元の目標は以下の通りである。

- 学校周辺地域におけるフィールドワークや地形図の読図を通じて，図3に示す地理の概念やESDの概念[32]を獲得する（思考・判断・表現）。
- 学校周辺地域におけるフィールドワークや地形図の読図を通じて，地理的技能を習得する（資料活用の技能）。
- 新旧地形図を用いた作業を通じて，学校周辺地域の現状や地域の歴史的変遷について様々な角度から理解を深める（知識・理解）。
- 新旧地形図を用いた作業を通じて，学校周辺地域が抱えている諸課題を発見し，課題解決や地域の将来展望へのきっかけをつかむ（思考・判断・表現）。
- 新旧地形図を用いた作業を通じて，学校周辺地域への興味・関心を高める（意欲・関心・態度）。

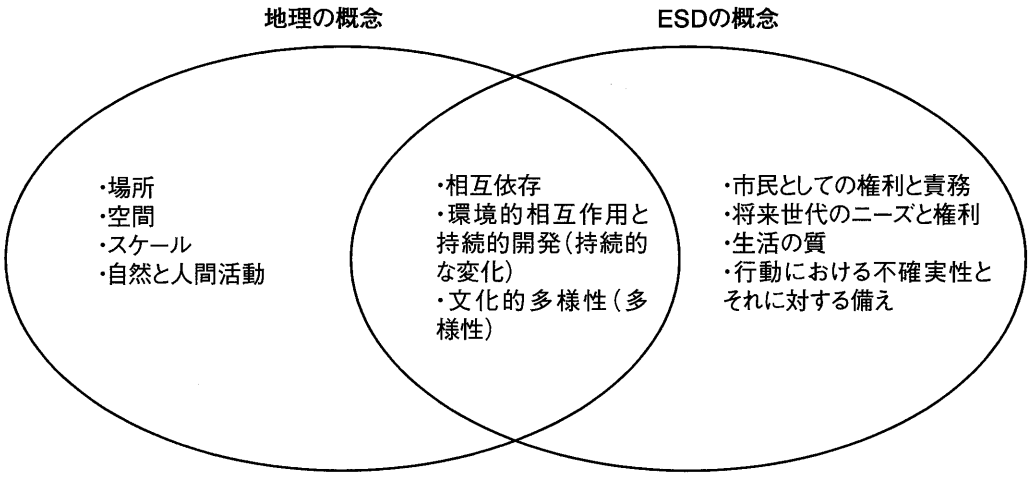

図3　地理の概念とESDの概念との関係性　梅村（2008）より作成。

表1は授業実践の一連の流れを示している。授業づくりに際し，筆者が心掛けたことは，①学校周辺地域をリアルにとらえ，地域理解を深めるための3回にわたるフィールドワークの実施，②松戸市の現状や歴史的変遷について理解を深めるための新旧3枚の地形図の活用，③生徒の主体的な学びを喚起する発問の設定，④知識を基盤に思考力・判断力・表現力を重視した学習プロセスの重視，⑤毎時間の学習目標の達成を検証するための振り返りの重視，の5点である。このような意識を持って授業に臨むことで，生徒たちは，意欲的に学習に取り組み，活

発な授業展開が可能になるものと考える。また，それとともに，学校周辺地域を含む松戸市全域への興味・関心を高めることができ，ひいては，そのことが地域社会における諸課題への当事者意識を喚起し，社会参加能力育成へ向けての素地をつくっていくものと考える。

表1　単元名「フィールドへのいざない」授業実践の流れ

時間	本時のねらい，テーマ	学習活動・学習内容	使用教材	評価の観点と方法
1 〜 5	【学校周辺を歩いてみよう！】 ・景観観察や読図，作図，記録の作成といったフィールドワークの手法を身につけるとともに，それを通じて以下の能力等を獲得する。 ① 地理的諸事象を地図と照らし合わせながら直接観察する能力。 ② 地理的諸事象相互の関係性を見いだす能力。 ③ 学校周辺地域への理解。 ④ 環境的相互作用，持続的開発などの地理的概念。 ⑤ 学校周辺地域の抱える諸課題の一端への気づき。	・学校周辺地域を大まかに把握するために，地図記号をもとに，定められた色で地図上を着色し，土地利用図を作成する。 ・学校周辺地域の地理的諸事象を注意深く観察しながら，授業者の側で指定した3つのルートを歩く。 ・自らが辿っているルートをその都度地図で確認しながら地理的諸事象間の位置関係を把握するとともに，ルートマップを作成する。 ・指定された複数の観察ポイントに立ち止まり，授業者の説明を聴きながら地理的諸事象の存在理由や成因について地理的条件や歴史的背景との関わりから考察する。 ・授業者の説明を手がかりに学校周辺地域の地理的諸事象を互いに結びつけ，地域理解を深める。 ・授業者の説明を手がかりに地域の抱える諸課題（住宅開発，自然災害，高齢化など）の一端に気づく。 ・フィールドワークを振り返りながら，学校周辺地域の現状や地理的特性について自己のコメントをまとめる。	・2500分の1松戸市都市計画図（2006年発行） ・ワークシート	・フィールドワークへの取り組み ・地図作業への取り組み ・ワークシートの記述内容 ・発表内容と態度 ・他者の発表を聴く態度
6	【学校周辺の地形図を読みとろう！(1)】 ・松戸市を事例に一定の規則に従った地形図の読図方法を身につけるとともに，それを通じて以下の能力等を獲得する。 ① 方位や距離，位置などの地理的概念。 ② 地名や土地利用の読み取りを通じた松戸市の地理的特性。 ③ 松戸市の現状についての理解。	・地形図を読み取ることで，学校と駅との位置関係を把握し，距離を計測するとともに，通学路のルートを辿る。 ・地形図を読み取ることで，学校周辺の海抜高度を求め，地形の特徴を確認する。 ・地形図より象徴的な地名や各種施設を確認し，松戸市の特徴について地理的条件や歴史的背景との関わりから考察する。 ・地形図学習を振り返りながら，松戸市の現状や地理的特性について自己のコメントをまとめる。	・国土地理院発行25,000分の1地形図「松戸」（2005年発行） ・ワークシート	・地形図作業への取り組み ・ワークシートの記述内容 ・発表内容と態度 ・他者の発表を聴く態度

7 〜 8	【学校周辺の地形図を読みとろう！(2)】 ・松戸市を事例に一定の規則に従った地形図の読図方法を身につけるとともに，それを通じて以下の能力等を獲得する。 ① 環境的相互作用，持続的開発などの地理的概念。 ② 戦後直後の松戸市の地理的特性について自然環境・社会環境との関係からの理解。 ③ 学校所在地である松戸市の戦後直後の社会的状況について歴史的背景との関わりからの理解。 ④ 戦後直後の松戸市の社会的状況を現在のそれとの比較からとらえる力。	・地形図を読み取ることで，戦後直後の松戸市の土地利用の状況を現在との比較の上で考察する。 ・地形図より等高線を辿ることで，松戸市の地形の特徴について考察する。 ・地形図より地名や集落形態，市街地の分布の特徴を読み取ることで，当時の松戸市の地理的特性について考察する。 ・地形図より土地利用の特徴を読み取り，それを地形環境との関わりから考察する。 ・地形図より地形の特徴や河川の流れを読み取ることで，当時の松戸市の開発の状況や自然災害の特性について考察する。 ・地形図学習を振り返りながら，戦後直後の松戸市の社会的状況や地理的特性について自己のコメントをまとめる。	・地理調査所発行２万５千分の１地形図「松戸」(1947年発行) ・国土地理院発行25,000分の１地形図「松戸」(2005年発行) ・ワークシート	・地形図作業への取り組み ・ワークシートの記述内容 ・発表内容と態度 ・他者の発表を聴く態度
9 〜 10	【学校周辺の地形図を読みとろう！(3)】 ・松戸市を事例に一定の規則に従った地形図の読図方法を身につけるとともに，それを通じて以下の能力等を獲得する。 ① 環境的相互作用，持続的開発などの地理的概念。 ② 高度経済成長期における松戸市の地理的特性について自然環境・社会環境との関係からの理解。 ③ 学校所在地である松戸市の高度経済成長期における社会的状況について歴史的背景との関わりからの理解。 ④ 高度経済成長期における松戸市の状況を現在との比較からとらえる力。 ⑤ 高度経済成長期以降の都市の発達過程とその問題点についての気づき。	・地図記号をもとに，定められた色で地図上を着色し，高度経済成長期の松戸市の土地利用の状況を過去や現在との比較の上で考察する。 ・地形図より地名や集落形態，市街地の分布の特性を読み取ることで，高度成長期当時の松戸市の地理的特性について考察する。 ・松戸市内の各種施設の立地の理由について，歴史的背景や地理的諸条件との関わりから考察する。 ・地形図より象徴的な地名や各種施設を確認し，松戸市の特徴について地理的条件や歴史的背景との関わりから考察する。 ・地形図学習を振り返りながら，高度経済成長期における松戸市の社会的状況や地理的特性について自己のコメントをまとめる。	・国土地理院発行２万５千分の１地形図「松戸」(1967年発行) ・国土地理院発行25,000分の１地形図「松戸 」(2005年発行) ・地理調査所発行２万５千分の１地形図「松戸」(1947年発行) ・ワークシート	・地形図作業への取り組み ・ワークシートの記述内容 ・発表内容と態度 ・他者の発表を聴く態度

(2) 授業実践の詳細

１〜５時限目：【学校周辺を歩いてみよう！】

１時間目は，フィールドワークに出向く前に学校周辺地域の特性をおおまかに把握するために，以下のｉ〜ｖの課題を提示し，全員に配布した2,500分の１都市計画図のコピーより土地利用図を作成した。

i．等高線の密な所を赤色で着色せよ。ii．尾根を黄色で着色せよ。iii．谷津を黄緑色で着色せよ。
iv．畑地を茶色で着色せよ。v．森林を緑色で着色せよ。vi．神社を青色で囲め。

2～4時間目は，地図（都市計画図のコピー）を持って野外へ繰り出した。具体的には，毎時間それぞれ異なるルートを地図で位置を確認し，周囲の景観に目を配りながら歩くよう指示を出した。その際，自分の足どりを地図上に赤色で記し，どのような経路を辿ったのかがわかるようルートマップを作成させた。また，観察ポイントで立ち止り，授業者がその度に特徴的な地理的事象について簡単な説明をした後，次の①～⑮の発問を行うことで，個々の事象の存在理由や成因について考えさせていった。

① ドブ川が直線化している理由とは何か。
② ドブ川に近づくにつれて土地が若干盛り上がっている理由とは何か。
③ 川沿いがかつて洪水に悩まされていた理由はどのような現象から理解できるのか。
④ 台地の急斜面部分はどのような土地利用なのか。
⑤ 「寒風」，「寒風沖」という地名の由来とは何か。
⑥ 旧家にみられる屋敷林は何のために設けられたのか。
⑦ 旧家にみられる屋敷神は何を奉ってあるのか。また，何のために設けられたのか。
⑧ 「内畑遺跡」はいつの時代の集落と推定されるのか。
⑨ 台地斜面上の家屋の建築にあたってどのような工夫が見られるのか。
⑩ 宅地開発の進展によってどのような災害が起こり得るのか。
⑪ 畑地が周囲より一段高い所に存在する理由とは何か。
⑫ 畑地ではどのような作物を栽培しているのか。
⑬ 生産緑地とは何か。
⑭ 「安房須神社」の建立の由来とは何か。また，神社は何のために設置されたのか。
⑮ 「新作」という地名の由来とは何か。

5時間目は，3時間分のフィールドワークを振り返る意味で，自らが辿ったルートマップを確認させるとともに，①～⑮の発問への解答をワークシートにまとめさせた。それを踏まえ，発問に関する補足説明をこちらで行った後，今回のフィールドワークを通じて気づいたこと，感じたことをワークシートに具体的に記入させ，数人を指名して発表させた。

生徒の感想（一部を抜粋）：下線部は筆者による。

1. 今回野外観察をして，専松（筆者註：筆者の勤務校の略称。以下同様）の周りがこんなにも標高差がある所や，急斜面，川があることを知って驚きました。また，急斜面や川があることなどにはそれぞれ理由があって，そのような地形になっていることがわかりました。登下校中に，周りの地形を見て歩いて見るのも楽しそうだと思えました。
2. 複雑な地形が入り組んでいるなかで，家などを工夫して建てていて，感心した。ただ，地震が来たら，斜面上の家屋が崩れてしまわないか心配だ。学校の南側以外，高低差がすごくある気がした。南側はゆるやかな地形が続いている。
3. 学校周辺の土地はとても段差が多い土地だなと思った。今まで知らなかった所をいろいろ歩いて，いろんな特徴や歴史を知ることができた。土砂崩れや洪水など被害の多かった土地なんだと感じた。もう人の住んでいない家が多かった。
4. 6年間通っているにも関わらず，知らない道ばかりを歩いた。普段住宅街なんて何にも気に留めず歩いていたけど，古い家や小さな畑，段差など細かく注目すると，建築の工夫や高齢者の問題など，様々なことに気づけた。これから普通に道を歩く時もいろいろなものに着目したら，もっといろいろなものを見つけられそうだ。

6時限目:【学校周辺の地形図を読みとろう！(1)】

本時では，２万５千分の１地形図（2005年発行）のコピーとそれに付随するワークシートを全員に配布し，これらをもとに学校周辺地域を含む松戸市の現状や都市としての性格（住宅衛星都市，内陸工業都市，近郊農業地域，戦前の軍事都市）について考察させた。すなわち，前時よりも広いスケールで地域を考察することで，地域の特性について明らかにしていった。具体的には，下記の発問を行いながら読図作業をさせ，そこからわかったことをワークシートにまとめ，発表させる形で授業を進めていった。

① 「専松」に赤丸をつけよ。
② 「専松」付近のおおよその海抜高度を水準点・三角点を参考にして求めよ。
③ 「北松戸駅（松戸新田駅）」から「専松」までの通学路を赤色でたどれ。
④ 「北松戸駅（松戸新田駅）」から「専松」までの直線距離を定規で測り，kmで求めよ。
⑤ 地図記号を手がかりに「北松戸」「稔台」「松飛台」の三つの工業団地の範囲を黄色で着色せよ。
⑥ 「松飛台」という地名の由来について，付近に位置する陸上自衛隊との関わりから述べよ。
⑦ 「二十世紀が丘」と名づけられている地名に青丸をつけるとともに，その地名の由来について述べよ。
⑧ 「松戸駅」周辺市街地を橙色で着色せよ。また，この市街地が発達した理由について２つあげよ。
⑨ 「小金原」，「常盤平」などの大規模団地に緑丸をつけるとともに，大規模団地が多く存在している理由を述べよ。

授業の最後には，筆者が提示した発問について補足説明を行い，今回の読図作業を通じて気づいたこと，感じたことをワークシートに具体的に記入させ，数人を指名して発表させた。

生徒の感想（一部を抜粋）：下線部は筆者による。
1. 団地の多く存在している理由や地名の理由に着目することで，その地の歴史やドーナツ化，ベッドタウン化などの社会問題にまで触れることができ，多くのことを学べた。地域に着目することの面白味を知った。地元のことをもっと知りたい。
2. 土地の名前に今まで着目していなかったが，ちゃんとした意味があるのだなと思った。自分が住んでいる地域の意味も調べてみたい。
3. 身のまわりのことでいつも歩いている所でも都市計画図を見て，見つめ直してみると様々なことが見え。また，見えたことから他の情報を推測することができることがわかった。
4. 松戸の地図を詳しく見たことがなかったので，勉強になった。私の住んでいる所とは違って，畑や工場が多かった。北松戸周辺はベッドタウンとして最適な場所だということがわかった。

7，8時限目：【学校周辺の地形図を読みとろう！(2)】

本時では，２万５千分の１地形図（1947年発行）のコピーとそれに付随するワークシートを全員に配布し，松戸市の戦後直後の社会的状況について２時間かけて考察させた。その際，前時に配布した2005年発行の地形図を活用し，現在の状況との違いに着目させながら当時の状況について理解を深めさせ，近代以降の松戸の歴史への興味・関心を喚起させていった。生徒たちは，地形図より当時の台地の開発状況を判断することで，水戸街道を境に台地（下総台地）と低地（江戸川氾濫原）とに区分される松戸の地形の特徴を明確にとらえることができた。また，松戸駅付近の江戸川沿いの低地や水戸街道沿いに中心市街地の広がりが見られることから，松戸の都市としての成立条件や発展の経緯についても地形図上から考察することができた。さらには，集落の立地が崖下に集中して見られることからその要因について水の確保との関係からとらえることができた。すなわち，地形図を読図することで，当時の人々がどのような工夫をしながら環境と向き合って生活していたのかを推測し，思いを馳せることができたといえる。授業は，下記の発問を行いながら読図作業をさせ，そこからわかったことをワークシートにまとめ，発表させる形で進めていった。

① 現在の「専松」周辺はどのような土地利用がなされていたのか述べよ。
② 「専松」周辺の等高線を赤色でたどり，地形の特徴について述べよ。
③ 「常磐線」より西側は水田が広がっているが，その理由について「～新田」という地名を手がかりにしながら述べよ。
④ 「水戸街道」沿いの集落を青色で着色せよ。
⑤ この集落はもともとどのような特徴を持っているのか述べよ。
⑥ 中心市街地を橙色で着色せよ。
⑦ 中心市街地が駅周辺よりも「江戸川」や「水戸街道」沿いに集中している理由について，「納屋川岸」という地名を手がかりにしながら述べよ。
⑧ 台地と低地のおおまかな境界線を緑色の線で引け。
⑨ 台地上では低地と比較してあまり開発がなされていない理由について，地形の特徴との関わりから述べよ。
⑩ 低地の川沿いで頻繁に起こり得る自然災害をあげよ。
⑪ 「坂川」が直線状になっている理由について述べよ。
⑫ 崖下に位置する「上矢切」，「中矢切」，「下矢切」，それぞれの集落を桃色で着色せよ。
⑬ なぜ集落がここに発達したのか述べよ。

授業の最後には，筆者が提示した発問についての補足説明を行い，今回の読図作業を通じて気づいたこと，感じたことをワークシートに具体的に記入させ，数人を指名して発表させた。

生徒の感想（一部を抜粋）：下線部は筆者による。
1. 現在と昔の地図を見比べてみて，川や地名以外はまるで別の土地のように変わっていて，ビックリしました。現在も使われている「～新田」などの地名にはちゃんとした由来があって，昔の人の生活も読みとることができるので，すごいなと実感しました。江戸川も交通手段だったとは驚きました。自分で地図を見て読みとる楽しさを知りました。
2. 昔と今の地図を比べることで人間の生き様がわかった。崖下に家が集中しているのは台地に比べて水を持ってきやすいからであり，川が蛇行しているのをまっすぐにするのは洪水を防ぐためであり，すべての地形には意味がある。今回の授業でこういったことを学べたので，今後知らない土地や初めて行く地に行く時は地形一つ一つに着目し意味を考えながら歩きたい。
3. 土地の利用から当時の人がどのようなことを考え，どんな暮らしをしているかを想像するのは難しいが，少しでも読みとれると楽しかった。地図から人の生きる知恵を読みとれるとは思っていなかった。
4. 水害を防ぐために様々な工夫がされているなと感じました。自然なりの流れを変えてしまったり，捻じ曲げてしまったことはほめられたものではありませんが，人々が生み出した「守る知恵」は受け継いだ方が良い。

9，10時間目：【学校周辺の地形図を読みとろう！（3）】

本時では，２万５千分の１地形図「松戸」（1967年発行）のコピーとそれに付随するワークシートを全員に配布し，松戸市の高度経済成長期の社会的状況について２時間かけて考察させた。その際，先の授業で配布した2005年発行の地形図を活用し，現在の状況との違いに着目させながら当時の状況について理解を深めさせるとともに，1947年発行の地形図とも比較させながら地域的変貌の著しい高度経済期における松戸への興味・関心を喚起させていった。生徒たちは，地形図より，地形と土地利用との関係が密接であることを理解した。

具体的には，低地には水田，台地上には畑地や果樹園，台地斜面上には森林が卓越しており，ここから地形の特性を上手く生かしながら生業を営んでいた当時の農民の生きる知恵，すなわち「人間と環境との望ましい関係のあり方」ついて学ぶことができる。また，路村，塊村など

の村落形態がきちんと保たれており，東京都心から半径20㎞に位置するにもかかわらず，当時は農村景観が色濃く残っていたことを読み取ることができた。しかしながら，大規模団地の造成が始まり，人口のドーナツ化現象が進行していったこと，台地の等高線の消失から新たな宅地開発が始まっていたことが地形図から読み取れ，首都圏の住宅衛星都市としての地位を確立していく時期に入ったことがわかる。また，開発に伴い農地の減少や森林伐採，地形改変といった環境破壊，スプロール現象が同時に進行していること，それに伴い後々どのような弊害が生じたのかを推測することができた。授業では，下記の発問をしながら，読図作業をさせ，そこからわかったことをワークシートにまとめ，発表させる形で進めていった。

① 「専松」を探して赤色で囲むとともに，その周辺の景観は現在と比較してどのように違うのか述べよ。
② 水田を黄緑色で着色するとともに，それはどのような地形上に分布しているのか述べよ。
③ 果樹園を桃色で着色するとともに，それはどのような地形上に分布しているのか述べよ。
④ 「陣ヶ前」，「北国分町」など多くの台地上で等高線が消失し，空き地で土地利用がなされていない理由について述べよ。
⑤ 「大橋」「秋山」の集落を茶色で着色するとともに，その形態についてどのような特徴がみられるのか述べよ。
⑥ 「大町」の集落を茶色で着色するとともに，その形態についてどのような特徴がみられるのか述べよ。
⑦ 「～谷」，「～台」，「～沢」などその土地の地形を表す地名を青色で囲め。
⑧ 「八柱霊園」が千葉県にあるのに都営である理由について述べよ。
⑨ 「貝柄掘込」という地名に由来について考えよ。
⑩ 「北松戸」，「松飛台」の工業団地及び競輪場が開設された理由について述べよ。
⑪ 「江戸川」の人工堤防を黄色で着色し，堤防の高さを示す数値を赤で囲め。
⑫ 江戸川沿いで頻繁に起こっていた自然災害とは何か。

授業の最後には，筆者が提示した発問についての補足説明を行い，今回の読図作業を通じて気づいたこと，感じたことをワークシートに具体的に記入させ，数人を指名して発表させた。

生徒の感想（一部を抜粋）：下線部は筆者による。
1. 前回の授業で使った60年前の地図に比べて40年前の地図は今でも知っている建物が増え，見やすかった。また，地図記号ごとに色分けすることで，その土地の特徴を見いだすことができ，わかりやすかった。地図で時代背景を知ることの面白味を知った。
2. 過去から現在まで学校周辺の地図を見て，土地利用の工夫の仕方を見ることができた。今現在，学校周辺には住宅に商業施設，工業団地などがあるが，それは先人の生きる知恵が残っているということがよくわかった。地形図の読み取りをして，登下校時に周りを見て歩くようになった。松戸市が台地や谷などの様々な地形に恵まれていることがわかった。
3. 空き地で土地利用がなされていない理由が，住宅開発のためというのは，首都圏の人口が増加したことにつながるのでは？戦時中だったら畑などの食物を作る場にされていたのかなと思った。先生が「昔，専松も海だった」というのは本当に驚いた。

(3) 授業実践の成果

毎時間の生徒たちの感想（特に筆者の引いた下線部分）からは，フィールドワークを通して普段何気なく見過ごしてきた学校周辺の景観に新たな価値を見出している様子を伺うことができた。このことは，「身近な地域の再発見」，さらには，これまで通い慣れた学校周辺地域に対する「新たな興味・関心の喚起」へとつながっていくものである。また，学校周辺の地理的諸事象を互いに結びつけることにより，「場所」，「空間」，「スケール」といった地理的概念や地理的課題への気づきも見られた。すなわち，ここか

ら地域への総合的理解とともに地理的見方・考え方の萌芽を読み取ることができる。

一方，新旧地形図の読図においては，学校周辺を含む松戸市の地域的特性について地名や地形，土地利用などを切り口に理解を深めるとともに，地域の歴史的変遷過程とそれをもたらした社会的背景，さらには，それによって生じた諸課題への指摘を感想文（特に筆者の引いた下線部分）より読み取ることができた。また，地形と土地利用との関係から先人の生活の知恵についての共感とそれを未来へと受け継いでいくことの大切さについても垣間見ることができ，そこから「自然と人間活動」という地理的概念はもとより，「環境的相互作用と持続的発展」，「生活の質」，「将来世代のニーズと権利」といったESDの概念も浮かび上がってこよう。

今回の学習をきっかけに，自分自身の居住する地域について，調査・研究を希望する意欲的な生徒が出てきた。そこで本実践終了後に提示した夏季休業中の学習課題は，下記のねらいの下，「身近な地域の調査レポート」の作成を全員に義務づけた。

・学校周辺地域での学習成果を踏まえて，自分の居住する地域を事例に地域への見方・考え方を養う。
・地域調査に必要とされる景観観察能力や資料収集・分析能力，レポート作成能力などの地理的技能を身につける。
・地域調査の成果をもとにレポート作成を行うことで，自分の居住する地域への理解を深める。

レポートの内容は，自分の居住している地域（市区町村規模のレベル）について，地理的諸事象（地形，気候，歴史，人口，生活，文化，産業，他地域との結びつき，抱えている課題，将来展望など）を踏まえながら総合的な観点から分析・考察し，その成果をレポートに的確にまとめていくというものである。生徒たちがレポートに取り組み，自地域の地理的特性や課題を発見し，課題への解決策や地域の将来展望について考えるプロセスを通じて，ESDの概念である「市民としての権利と責務」が身についていくことを最終的な目標とした。レポート回収後に得られた生徒たちのコメントからは，「自分の町の将来のことに関して考える良いきっかけになった」，「町についてもっと知りたいと思った」，「自分の住んでいる所について見方が変わった」，「普段何気なく見ていた光景もいろいろ調べた後に見ると新鮮だった」という前向きな反応がみられたことから，地域社会へ参加・行動する素地をつくることができたといえる。

5．社会参加に向けた望ましい授業の方向性

筆者は，「生徒自らが学習活動を通じ社会で起こる様々な問題と自身とのつながりについて気づくとともに，そこから自分の価値観や生き方を確立し，市民として社会参加のきっかけをつかむ」ことを念頭に日々の授業に臨んでいる。今回もそうした意図の下で授業を行い，生徒たちはこちらの願いに応えながら，意欲的に授業に取り組んでくれた。このような学習意欲の継続によって，地域認識が深化するとともに，地域に対する興味・関心の度合いが高まり，結果的に彼らの社会参加能力が徐々に芽生えてくるはずである。そのことは，前章(3)節で論じた本実践の成果からも判断することができよう。

しかしながら，本実践ではフィールドワークと地形図の読図が中心の授業であるゆえ，地域認識を深化させることに必然的に傾斜する形となった。その結果，社会参加へ向けた問題解決のアプローチやそれを可能にする参加型・協働型の学習については，時間的な制約もあり，取り入れることができなかった。今後へ向けての反省材料としたい。

最後に，社会参加を視野に入れた望ましい授業の方向性について示すとともに，それを踏まえた授業プランについて提案することで本稿のむすびとしたい。この授業プランは，表２に示すように，学校周辺地域における野外調査と地形図作業で培った地域認識を基盤に，地域問題の解決，地域政策への提言を志向したものであり，参加型・協働型学習をメインに構成されて

いる。今後の課題として，本稿で提案した授業プランに沿って実践を行い，その成果を検証することにある。

① 地域認識のより一層の深化

グループごとに松戸市の概要について調査するべく，異なる地理的諸事象をもとにテーマを設定する。そして，テーマに関連した文献を収集し，それを読み取り，討論を行い，結論，発表へと導く。

② 認識から参加・行動に至る学習プロセスの確立

グループごとに松戸市の抱える諸課題について異なるテーマを設定する。テーマをもとにウェブマップ[33]を作成し，諸課題間の因果関係を見出していく。そして，諸課題の現状を踏まえ，解決へ向けての手立てについて考えるとともに，松戸の望ましい将来像についてキーワードを複数設定し，それに基づいたビジョンを構築し，具体的提案を行う。その成果を地域社会へどのように還元できるのかが課題である。

③ 個別学習から協働学習への発展

「異なる価値観を持った人々の集合体」である現実空間を踏まえ，協働の学びの場を設定する必要がある。グループ作業やディスカッションを組み込んだワークショップ型の学習を積極的に取り入れていきたい。ただし，授業時数や受験対策に起因する制約をどう克服するかが課題である。

④ ローカルな課題とグローバルな課題とのリンク

松戸の抱える課題（住宅開発，少子高齢化，自然災害，交通渋滞，ゴミ処理など）を国内外の他都市の事例と比較・考察し，世界共通の問題としてとらえることが可能である。また，地域の課題がもたらす影響をより大きなスケールで考察することで，環境・開発などの地球的課題とリンクすることができるだろう。この面からの教材開発も急務とされる。

表２　社会参加を視野に入れた学校周辺地域を対象とした授業実践プラン

時間	本時のねらい，テーマ	学習活動・学習内容	使用教材	評価の観点と方法
1 〜 4	【松戸市について様々な側面から調査しよう！】 ・ポスターセッションを通じて，本校所在地である松戸市の概要について，様々な側面から理解する。 ・松戸市の概要について，関連文献を適切に読み取り，それを踏まえて討論を行い，結論へ導くためのスキルを身につける。 ・松戸市について，多面的に理解することで，地域社会に対するさらなる興味・関心を抱く。	・グループを編成し，グループごとに指定されたテーマ（地形，気候，歴史，人口，生活・文化，産業，他地域との結びつき）に関する資料を図書館やインターネットから収集する。 ・グループごとに松戸市関連の文献資料の読み取りを行い，それに基づいて議論する。 ・資料から読み取ったことや議論したことに基づきポイントを整理する。 ・自分たちの調査したテーマについて整理したことを模造紙にポスターとしてまとめる。 ・グループごとに自分たちが模造紙にまとめたことをポスター掲示し，発表する。 ・他グループの発表内容を聴き，必要に応じてメモを取る。 ・他のグループからの質疑に応える。 ・松戸市の概要について自己の見解をまとめ，本単元を振り返る。	・市史，県史，市勢要覧などの関連文献 ・インターネット検索資料 ・模造紙 ・マジックペン ・ワークシート	・グループ内での作業の様子 ・ポスターの出来ばえ ・プレゼンテーション内容とスキルの程度 ・他グループのプレゼンを聴く態度 ・ワークシートの記述内容

5 〜 10	【松戸市の抱えている課題を見いだし，解決策を考えよう！】 ・写真の読み取りやフィールドワーク，地形図作業の成果を踏まえ，松戸市の抱えている課題に気づく。 ・Web Map の作成を通じて，諸課題の因果関係を見出す。 ・松戸市の抱えている課題とその因果関係について発見するために，作業，討論，発表の一連のスキルを身につける。 ・松戸市の抱える課題を踏まえ，その解決へ向けての手立てについて考える。	・グループごとに2枚の写真に共通するテーマを考え，模造紙に記入する。 ・グループごとに自分たちが考えたテーマとその根拠について発表する。 ・写真から松戸市の抱えている課題（住宅開発，少子高齢化，自然災害，交通渋滞，ゴミ処理，景観問題，放射能汚染，市街地衰退化など）について見出す。 ・写真から見出した諸課題を地図化し，諸課題の空間的分布の特徴についてとらえる。 ・写真判読のみならず，フィールドワークや地形図作業での学習成果を踏まえた上で松戸市が抱えている課題について再認識する。 ・グループごとに指定された課題について模造紙に Web Map を作成する。 ・完成した Web Map からどのようなことがわかったのかグループごとに発表する。 ・他グループの発表内容を聴き，必要に応じてメモを取る。 ・他のグループからの質疑に応える。 ・グループごとに作成した Web Map の内容を踏まえ，松戸市が抱えている諸課題への解決策について議論する。 ・議論したことをまとめ，解決策を立案する。 ・立案した解決策をポスターとして模造紙にまとめる。 ・グループごとに模造紙にまとめたことを発表する。 ・他グループの発表内容を聴き，必要に応じてメモを取る。 ・他のグループからの質疑に応える。 ・松戸市の抱えている課題について自己の見解をまとめ，本単元を振り返る。	・筆者撮影の松戸市内各地域の写真 ・市史や県史，市勢要覧などの関連文献 ・新聞記事 ・国土地理院発行２万５千分の１地形図「松戸」(1967年発行) ・国土地理院発行 25,000 分の１地形図「松戸 」(2005 年発行) ・地理調査所発行２万５千分の１地形図「松戸」(1947年発行) ・模造紙 ・マジックペン ・ワークシート	・グループ内での作業の様子 ・Web Map の出来ばえ ・ポスターの出来ばえ ・プレゼンテーション内容とスキルの程度 ・他グループのプレゼンを聴く態度 ・ワークシートの記述内容
11 〜 13	【松戸市活性化プランを打ち立てよう！】 ・松戸市活性化プランの策定を通じて，松戸市の将来像について様々な角度から理解する。 ・松戸市活性化プランの策定を通じて，松戸市のあるべき将来像について様々	・グループごとに提案した諸課題の解決策を踏まえ，松戸市活性化のための３つのキーワードを考え，それを模造紙にまとめる。 ・グループごとに３つのキーワードとそれに至った根拠について発表する。	・模造紙 ・マジックペン ・ワークシート	・グループ内での作業の様子 ・ポスターの出来ばえ ・プレゼンテーション内容とスキルの程度

	な観点から思考し，判断する力を身につける。 ・松戸市活性化プランの策定を通じて，松戸市のあるべき将来像について討論し，結論を見出すとともに，その成果をもとに発表を適切に行う。 ・松戸市活性化プランの策定を通じて，松戸市のあるべき将来像について思索を深めることで，学校周辺地域に対するさらなる興味・関心を抱く。	・他グループの発表を聴き，必要に応じてノートにメモを取る。 ・各グループが設定した3つのキーワードに基づき，松戸市のあるべき将来像について議論する。 ・あるべき将来像実現へ向けての松戸市活性化プラン策定の方向性について議論する。 ・議論したことをもとに，松戸市活性化プランを模造紙にポスターの形で示す。 ・グループごとに自分たちが模造紙にまとめたことをポスター掲示し，発表する。 ・他グループの発表を聴き，必要に応じてノートにメモを取る。 ・各グループの提案したプランの中で優れたものを投票（わかりやすさ，斬新性，実現可能性等などが判定基準）で選ぶ。 ・松戸市の将来像について自己の見解をまとめ，本単元を振り返る。		・他グループのプレゼンを聴く態度 ・ワークシートの記述内容
14 〜 16	【松戸市活性化プランを充実したものにしよう！】 ・松戸市活性化プランのさらなる充実のために，国内外各都市における地域活性化の取り組みの事例を知る。 ・他都市の地域活性化への取り組みを踏まえ，より充実した松戸市活性化プランのあり方について考える。 ・自分たちが作成した松戸市活性化プランを地域社会へ提案するとともに，その実現へ向けての実行可能な取り組みについて考える。	・松戸市と同じ大都市圏の衛星都市の性格を持った国内外他都市のまちづくりプランについて，文献をもとに調査する。 ・他都市のプランと松戸市とのそれとを比較し，松戸市の優れている所，課題となる所をそれぞれ見出す。 ・他都市と松戸市の比較を踏まえた上で，より充実した活性化プランを作成する。 ・作成したプランを地域社会で発表し，プラン実現へ向けた具体的な取り組みについて議論する。 ・具体的な取り組みを実行するための策を考える。 ・本学習の内容全体を振り返る。	・教科書 ・資料集 ・地理学関係文献 ・他都市の市史，市勢要覧などの関連文献，ホームページ ・ワークシート	・グループ内での作業の様子 ・ポスターの出来ばえ ・プレゼンテーション内容とスキルの程度 ・他グループのプレゼンを聴く態度 ・ワークシートの記述内容

註

1）滝沢由美子（2009）：地理教育の現状と課題．お茶の水地理，49，pp.2-9.

2）泉貴久・岩本廣美（2012）：地理学会の社会貢献活動と地理教育．E-journal GEO，7（1），pp.74-81.

3）永田成文（2013）：『市民性を育成する地理授業の開発―「社会的論争問題学習」を視点として―』風間書房.

4）山口幸男（2002）：『社会科地理教育論』古今書院.

5）内藤正典（1990）：地理学における地域研究の方向性．地理，35（4），pp.33-42.

6）伊藤達雄（1998）：人文地理学における地域政策研究の課題と展望．地理学評論，71A（5），pp.315-322.

7）伊藤修一・有馬貴之・駒木伸比古・林琢也・鈴木晃志郎編（2012）：『役に立つ地理学』古今書院．小野有五（2013）：『たたかう地理学 Active Geography』古今書院.

8）小野によれば，「行為主体」と解釈され，「環境問題や権力闘争の場において，直接的・間接的な利害関係をもち，さまざまな行為によって，その問題や闘争に関わる人のこと」を言う。

9）近年，社会参画という言葉が，学習指導要領をはじめ様々な場で用いられているが，社会参加とどのように異なるのか。唐木（2010）によれば，参加とは「現に存在している活動や行事・会合に加わること」で，参画とは「活動や行事・会合をいつ・どこで・どのように実施するのかを計画し，実際に運営するまでのすべてを担うこと」としている。このことから，両者の違いは学習者の主体性の度合いによるものと解釈し，本稿では，参加という言葉を用いていきたい。なぜなら，学習者の社会参加能力は当初は受動的なものであるが，それが教師をはじめとする大人の参与によって徐々に能動的なものになっていくものと考えられるからである。唐木清志（2010）：社会参画と社会科．唐木清志・西村公孝・藤原孝章『社会参画と社会科教育の創造』学文社，pp.7-29.

10）宮崎猛（2009）：社会参加学習．日本公民教育学会編『公民教育事典』第一学習社，p.165.

11）前掲書 3）。

12）吉田剛（2009）：公民教育と地理教育．日本公民教育学会編『公民教育事典』第一学習社，pp.16-17.

13）泉貴久（2006）：社会参加学習．日本地理教育学会編『地理教育用語技能事典』帝国書院，p.131.

14）泉貴久（2012）:ESD の概念・特徴と地理教育―ESD の普及・発展へ向けて―．泉貴久・梅村松秀・福島義和・池下誠編『社会参画の授業づくり―持続可能な社会にむけて―』古今書院，pp.110-116.

15）西脇保幸（2003）：地理教育の目標．村山祐司編『21 世紀の地理―新しい地理教育―』朝倉書店，pp.53-78．泉貴久（2008）：地球市民育成のための地理教育のあり方―カリキュラム開発へ向けての一試論―．中等社会科教育研究，27，pp.13-26．泉貴久（2009）：地球市民の育成と地理教育．中村和郎・高橋伸夫・谷内達・犬井正編『地理教育講座 第Ⅰ巻　地理教育の目的と役割』古今書院，pp.191-211．荒井正剛（2011）：ニュージーランドの中等部社会科学習と高等部地理学習―市民性育成を重視する社会科地理教育―．新地理，59（1），pp.16-27.

16）1992 年に国際地理学連合地理教育委員会によって制定された。同憲章は，「現代と未来に生きる有為でかつ活動的な市民を育成するために，現代世界が直面する主要な問題の解決へ向けて全ての世代の人々がそれらの問題に関心を持つこと」をねらいとしており，それを実現するべく価値判断，意思決定を踏まえた問題解決型の学習プロセスを重視している。同憲章は今日，地理教育のグローバルスタンダードとして位置づけられている。中山修一（1993）：国際地理学

連合・地理教育委員会編：地理教育国際憲章（全訳）．地理科学，48，pp.104-119.
17）井田仁康（2006）：社会科における地理的技能の育成．日本社会科教育学会出版プロジェクト編『新時代を拓く社会科の挑戦』第一学習社，pp.112-121.
18）西脇保幸（2008）：社会参加能力と一貫カリキュラム．山口幸男・西木敏夫・八田二三一・小林正人・泉貴久編『地理教育カリキュラムの創造―小・中・高一貫カリキュラム―』古今書院，pp.116-122.
19）竹内裕一（2010）：社会参加学習において子どもたちが獲得したもの―市民ワークショップ「よみがえれ！新浦安駅前『公共広場』大作戦」（2001年）に参加した子どもたちへの追跡調査から―．新地理，58（1），pp.1-19.
20）竹内裕一（2012）：地域における社会参加と地理教育．E-journal GEO，7（1），pp.65-73.
21）前掲書3）。
22）前掲書14）。
23）永田が設定した学習内容の中で，中学校を対象としたものは，「イスラム文化受容の是非」，「廃棄物輸出の是非」，「外国人労働者受け入れの是非」の3テーマで，いずれも日本を対象とした論争問題である。中学校社会科地理的分野が日本と世界を対象とした地誌的アプローチで構成されていることを考えると，これらのテーマを年間学習計画にどのように組み込んでいくのかが課題といえる。また，高校を対象としたものは，「捕鯨対立問題」，「地球温暖化問題」，「南北問題」の3テーマで，いずれも世界を対象とした政策課題である。これらのテーマは，主題的アプローチを駆使した地理Aでの実践を想定して開発されている。系統地理的アプローチと地誌的アプローチで構成される地理Bにおいて，これら政策課題をどう組み込んでいくのかが課題である。
24）唐木清志（2012）：社会参画．日本社会科教育学会編『新版　社会科教育事典』ぎょうせい，pp.46-47.
25）唐木清志（2008）：『子どもの社会参加と社会科教育―日本型サービス・ラーニングの構想―』東洋館出版社.
26）前掲書25）。
27）前掲書25）では，サービス・ラーニングの目標を3つの観点からとらえている。本文に示した3つの行為①～③は，それぞれ「学問的・知的発達」，「社会的・個人的発達」，「政治的有効性と参加」の3つの観点とそれぞれ合致している。
28）永野（2006）は，「場所」の概念について，「位置と土地との関係」と定義づけている。また，「場所」の成立条件について，「地形や気候など自然との関係」と「人間活動の社会・経済的な関係」をあげている。永野征男（2006）：地域，地域性，場所．日本地理教育学会編『地理教育用語技能事典』帝国書院，p.19.
29）筆者の勤務校（以下，本校）は，私立大学の付属高校で，千葉県松戸市の要請を受けて高度経済成長期に設立された経緯があったため，地域との関係は特別活動や課外活動などを通じて比較的連携がとれていたと言える。近年は，中学校を併設し，6年間の一貫教育を目指すとともに，親大学や地域との連携でシンポジウムを開催したりするなど，学術成果を市民に還元するための「仲介者」としての役割を担うようになっている（泉2011）。しかしながら，教科教育においては，地域社会を意識した学習活動や授業実践は皆無であったといえる。しかも，生徒の通学圏も市域や県域をまたがって広範囲に及んでいるため，彼らの学校周辺地域を含めた松戸市に対する意識も希薄な状況にあるといえる。その意味において，本実践を本校における教科教育における社会参加学習の出発点として位置づけていきたい。泉貴久（2011）：松戸市民対象地域シンポジウム報告―一高等学校の地域社会へ向けての発信―．地理，56（5），pp.120-125.

30) 生徒たちは地形環境や地形図の基本的事項については，授業実施年の4~5月に既習しており，野外観察や地形図の読図に必要とされる基礎知識はある程度持ち合わせているものと考える。

31) 本実践は，高校学習指導要領地理B「(1)様々な地図と地理的技能」「イ．地図の活用と地域調査」に対応している。本内容は，『高等学校学習指導要領解説　地理歴史編』によると，「直接的に調査できる地域を地図を活用して多面的・多角的に調査し，生活圏の地域的特色をとらえる地理的技能を身に付けさせる」ことで，地域調査の方法を習得させるとともに，調査結果の考察を踏まえ，地域の抱える課題を浮かび上がらせることをねらいしている。このことから，本内容は，社会参加能力の育成を間接的に意図しているものと考える。文部科学省（2010）：『高等学校学習指導要領解説　地理歴史編』教育出版.

32) 図3に示す地理の概念，ESDの概念はともに市民性や社会参加を測るための指標となるものと筆者は考える。前者の概念は永田（2013）が言及する「地理認識」に合致し，後者の概念は「社会参加に関する資質」に合致するものと考える。梅村（2008）によれば，地理の概念は「英国ナショナル・カリキュラム地理2008年版」（同国の初等・中等教育段階を対象）に示された地理における7つの項目（場所，空間，スケール，相互依存，自然と人間活動，環境的相互作用と持続的開発，文化的多様性）のことを指している。また，ESDの概念は「英国環境・食糧・農村地域省」が1998年に発行した「持続的な開発のための教育パネル」に示された「持続的な開発」のための7つの原則（相互依存性，市民としての権利と責務，将来世代のニーズと権利，多様性，生活の質，持続的な変化，行動における不確実性とそれへの備え）のことを指している。地理の概念とESDの概念の内3つの項目は互いに重なる部分であり，ここから地理がESDの主軸を担うことを読み取ることができる。梅村松秀（2008）：イギリス初等地理にみる学びのスタイルの転換―ESDのもとでの地理学習の特徴―．地理，53（9），pp.89~95.

33) 開発教育で用いられているウェビングの手法を用いて作成された系統図のことをいう。あるテーマを切り口に，そこから連想する事柄やキーワードを次々と書き加えていくことで，社会的諸事象相互の関連性に気づかせることをねらいとしている。詳細は，次の文献に詳しい。開発教育協会（2012）：『開発教育実践ハンドブック―参加型学習で世界を感じる―　改訂版』開発教育協会.